

# 談話主題の導入形式に関する研究ノート

## —— 存在文とコピュラ文の特立提示機能について ——

砂 川 有里子

### 1. はじめに

言語形式は、談話の中である一定の機能を有している。そのため、ある談話内でどの言語形式を用いるかは、言語外的世界を含めた当の談話のコンテキストに関わる様々な要件を満たす形で決定されなければならない。その要件の一つとして、ある言語表現によって指し示される対象が、発話関係者の意識の中でどのような認知状態にあるのかといった問題がある (Chafe1987)。例えば、聞き手の意識の中でまだ活性化されていない項目を談話の中で初めて用いるとき、話し手はある特定の形式を選びとらなければならないし、聞き手はその特定の形式を聞くことによって、その談話の展開に対する予測の手がかりを与えられる。本稿は、談話内に新しい項目を導入するときの言語形式に関する研究ノートであり、この研究のためのパイロット的調査の報告である。

ある項目が、ひとまとまりの談話の中で複数の節に渡って指示されているとき、その項目を談話主題と呼ぶ。ここで節とっているものは、南 (1974) の B 類以上の単位に限ることにしたいが、連体修飾は節の数に数えない。また引用句は引用された部分の節の数に加えて引用動詞もひとつの節として数えることにする。このような節の数えかたにもとづいて、新しい項目が出現してから 10 節目までの談話を観察し、その中で当の項目が再び指示されたとき、その項目を談話主題と認めることにする。

観察する談話の長さを 10 節目までとしたのは絶対的な基準に基くものではなく、作業を進める上で設定した便宜上の方策である。これは、比較的近接しているが、完全に隣接してはいない場合の繰り返しも同一談話内での繰り返しと理解すべきだと考えたことによる。例えば、次の談話の「頭」は、2 つめの節で導入された後、ひとつあいだをおいた 4 つめ以降の節でも繰り返し指示されている (上付き数字は節の数を指す)。

- (1) <sup>(1)</sup>みなさん、よく勘違いされるのですが、<sup>(2)</sup>例えば「頭」が痛いときに<sup>(3)</sup>頭痛薬を飲むと、<sup>(4)</sup>飲んだクスリがそのまま「頭」にいて<sup>(5)</sup>効くと<sup>(6)</sup>おもわれているようですね。<sup>(7)</sup>でも血液の中にはいったクスリは、「頭」だけではなくて、<sup>(8)</sup>手の先から足の先まで、全身にいています。

次の談話例では、初めて出現した「緊急のとき」という項目が次に現れるのは、初出の節も含めて7節目である。

- (2) <sup>(1)</sup>それから注射でないといけないのは「緊急のとき」です。<sup>(2)</sup>口から飲むクスリは胃から腸へ行って<sup>(3)</sup>吸収され、<sup>(4)</sup>肝臓を通して<sup>(5)</sup>血液中にはいるまでに、<sup>(6)</sup>15分から30分ぐらいかかりますから、<sup>(7)</sup>「すぐに処置しないといけない、というとき」には間に合いません。<sup>(8)</sup>「そういうとき」は静脈に注射すれば、<sup>(9)</sup>血液中のクスリの濃度は、すぐにあがります。

このように比較的離れて指示された項目であっても、ひとまとまりの談話内に存在していることがある。この種のものも対象とするため、10節までと比較的広い範囲に渡って観察することにしたわけである。

ところで(1)の談話では、「頭」の他に「頭痛薬」やそれを言い換えた「クスリ」という名詞も繰り返されている。このような場合、この談話は「頭」と「頭痛薬(クスリ)」の二つの談話主題に関するの叙述であると考えられる。この例は、「クスリ」というこの文章全体に渡る大きな談話主題の一部として「頭痛薬」が組み込まれ、さらにそれに関連するものとして「頭」というもっと小さな談話主題が取り上げられていると考えることができる。談話主題にはこの種の階層性が見られることが多い。しかし、ここでは階層性の問題についての考察は行わず、どのような階層にある談話主題であれ、それが初めて現れたときの節の形式を考察の対象とする。

談話主題の認定方法について、もう少し補足しておくことにしたい。(1)の談話例には「頭」という同じ名詞が繰り返し用いられているが、このような繰り返しのほかに、(2)に見られる言い替えや指示詞、あるいは人称代名詞や省略も同一指示の形式と認めることができる。その一方で、完全な同一指示とは言えないまでも、その項目の内容を具体的に示す例を挙げたり、その上位概念や下位概念を指す項目が後の節にあらわれてくる場合もある。次の例は「危険な場合」の具体的な事例が後続の談話で述べられているものである。

- (3) 症状がなくなるとクスリをやめたくりますが、自分で勝手に判断してやめると、「危険な場合」もあります。/たとえば高血圧の薬を飲んでる人が、血圧も下がり気分もよくなったと勝手にやめると、「リバウンド」

と<sup>1</sup>いって、か<sup>2</sup>えって血圧が急に上がって、脳出血などの発作を起こすこ<sup>3</sup>と<sup>4</sup>があります。(「/」は段落の切れ目を表す)

この種のものも、同じ項目を間接的に指し示していると考え、本稿の考察の対象とする。

以上のような談話主題がその談話に初めて導入されるとき節の形式を観察し、その特徴を述べるのが本稿の目的である。

2節ではある文章の中で談話主題が初めて導入されるとき節の形式を調査した結果を報告する。3節ではそれらのうちの存在文とコピュラ文について、これらの構造と談話主題の導入という機能との関わりを論じ、これらの構造がある項目の特立的な提示という機能と深い関わりを持つという点を明らかにする。

## 2. 談話主題の導入形式

調査したのは「クスリに関する11章」(『暮らしの手帖54』1995年2・3月号)という1万3千字弱の長さの文章である。この中で談話主題の導入部と考えられる節は58例観察できた。その内訳と用例は次の通りである。(用例の囲みは談話主題を示す。また、以下に示す用例は、特に断りのない限りは「クスリに関する11章」から採ったものである)

### (イ) 存在文 18例

- ・からだの中では、血圧が下がると血液の循環が出来なくなりますから、ある程度の血圧を保とうという働きがあります。

### (ロ) コピュラ文 10例

#### a. 「～は～だ」 2例

- ・クスリは体にとっては毒物ですから、……

#### b. 「～が～だ」 3例

- ・そうすると効かせたいところ以外の場所にも働いて、よけいな仕事をしてしまう場合もあるわけです。これが副作用です。

#### c. 「～のは～だ」 4例

- ・それから注射薬でないといけないのは緊急のときです。

#### d. 「～のが～だ」 1例

- ・それをもっと徹底させたのがカプセル剤です。

### (ハ) 存在文以外の形式で格助詞が用いられている場合 16例

- a. 「ガ格」 9例  
 ・それから血管が収縮しても血圧があがりますが、それには<sup>カルシウムイオン</sup>が働いています。
- b. 「ヲ格」 3例  
 ・そうすると、つぎにクスリをだすわけですが、最初は<sup>差し障りのないクスリ</sup>をだすのです。
- c. 「デ格」 2例  
 ・飲んだクスリは、胃を通して<sup>小腸の上部</sup>で吸収されます。
- d. 「へ格」 1例  
 ・小腸の粘膜から吸収されて、門脈を通して<sup>肝臓</sup>へ行きます。
- e. 「～ノタメニ」 1例  
 ・いま、ひとつのクスリを世の中にだすのに、十年以上、百億円以上の歳月と費用をかけているといわれていますが、その大半は<sup>安全性のチェック</sup>のために使われます。

(二) 「～モ」 10例

- ・副作用は、クスリがからだ全体に散らばるからおこるわけですが、しばらく前から、<sup>効いてほしいところだけ作用するクスリの研究</sup>もさかんです。

(ホ) 「～ハ」 2例

- ・<sup>抗生物質</sup>は、からだの中に入ってきた細菌をやっつけるわけですが、細菌をやっつけるまで、血液中の濃度は保っていた方がいいのです。

(へ) メタ表現 2例

- ・例えば「<sup>ミサイル療法</sup>」というのをきいたことはありませんか。

(へ) のメタ表現というのは、話し手が自分の言語活動のありかたを説明的に叙述するタイプの表現のことで、そこで導入される項目に注目するよう聞き手に促したり、その項目について話を進めるとい意思表示を行ったりするなど、その発話がある項目を導入するものであることを明示的、説明的に伝える表現である。この種のものは特定の表現形式が定まっているわけではなく、さまざまなタイプの言語表現が用いられる可能性がある。その点で、(イ) (ロ) のようなある一定の表現形式の枠内に納まるものとは区別すべきである。

(ハ) の格助詞が用いられている場合というのは、存在文のガ格名詞句以外の場合に関するもので、格助詞を伴った名詞句の形で導入され、その後の談話

で語りつがれていく。これらはほとんどが次に示すような有題の文で、文の主題「～は」について叙述する題述部に存在する名詞句である。

- (4) それから血管が収縮しても血圧があがりますが、それには**カルシウムイオン**がはたらいています。

また、次のように、B類の節の内部にある述語の項が語りつがれていく場合もある。

- (5) 抗生物質を飲んで**菌**が制圧されると、熱が下がったりしてすぐ症状が軽くなります。

以上のような位置に現れた名詞句は格助詞を伴うのが普通であるが、このような構文上の制約によって格助詞が用いられるもの以外にも格助詞を伴った名詞句というのは談話の中に非常に頻繁に現れるものである。そのため文章全体の中での数は膨大なものとなる。その中で後続の談話に語りつがれたケースはわずか16例で、その確率は非常に低いといわざるを得ない。したがって、単に格助詞が用いられたかどうかということだけでは新しい項目を導入するという機能と特に深い関連のあるものであるとは断じられない。調査を始めるに当たり、出来事の出現を表す現象文が観察されることを予想したが、今回の調査の限りではそのようなタイプの例は存在しなかった。現象文が用いられた場合には、そこで表された出来事やそれに関連する項目に関して語りつがれる傾向が見られるのではないかと推測されるが、この確認については今後の調査に待ちたいと思う。<sup>(注1)</sup>

(ホ)の「～ハ」によって提示された項目は、この文章の中で初めて登場する項目であるにも関わらず、聞き手の意識の中ですでに活性化されているものとして語られている。例えば次の「抗生物質」は、それ以前の談話では語られておらず、ここで初めて出現する項目である。

- (6) **抗生物質**は、からだの中に入ってきた細菌をやっつけるわけですから、細菌をやっつけるまで、血液中の濃度は保っておいた方がいいのです。

この文は、「飲み忘れに気づいたときにすぐ飲んだ方がよいクスリがある」といった内容に続くもので、その種のクスリの代表として聞き手の意識に上りやすいと話し手が判断したために抗生物質が「～ハ」を伴って取り上げられたものであると考えられる。そうでない場合は、例えば連体修飾節で先行文脈とのつながりを保証した上で「～ハ」を伴って提示するなどの方法が採られる。次の(7)は、「安政元年」という項目が、この文章全体の主題である「歌子」

との関連を保証する修飾を受けて、「～ハ」を伴って提示されている例である。

- (7) 歌子が生まれた安政元年は前年のペリーの黒船来航で200年以上続いた鎖国が終わりを告げた年に当たる。(『鹿鳴館の女帝, 下田歌子の女の武器』『SOPHIA』1995年7月号)

小説で、登場人物が初めて導入される際に連体修飾節も伴わず、直接「～ハ」によって示されることがあるが、それなどもこのタイプのものである。この種のもは、談話主題導入のための方式としてはきわめて有標な形式であると考えられる。

同様なことは(二)の「～モ」を伴って導入された談話主題の場合にも言えることかもしれない。しかし、この場合は58例中10例とサンプル数が少ないことから、「～ハ」ほど有標の方式ではなく、談話主題導入時に頻繁に用いられる表現形式のひとつとして考えるべきものなのではないかと思われる。しかし、その中身は、存在文やその他の動詞文、形容詞文、コピュラ文など雑多なものが含まれており、単純ではない。以下においてはこの場合も含めて、今述べた4つの方式については特に考察を加えず、残りの(イ)と(ロ)のタイプについてのみ触れることにしたい。

### 3. 特立提示機能

Hetzron (1975) は、後続の談話や発話の場面で想起させやすくするために文の中の一つの要素に対して特別の注意を喚起する機能がさまざまな言語の特定の形式に見られることを指摘し、その機能を特立提示機能 (presentative function) と名付けている。そして、このような注意喚起の形式が用いられるのは、(1) 後続の談話の中でその要素が間接的あるいは直接的に再び用いられるとき、(2) 後続の談話で述べられる事柄が、その要素と関連のある事柄であるとき、(3) 現実世界において起ころうとすることや行われることとその要素が何らかの関連があるとき、などの場合であるとしている。

この種の機能は、文が正しいか間違っているかといった厳格な文法規則ではなく、より緩やかな談話の原理に従うものである。したがって、特立提示機能を持つ言語形式が用いられたからといって、必ずしも常に後の談話の中でその要素が再び用いられなければならないといったものではない。Hetzron は、その事情を次のように述べている。

ここで私が主張したいのは、後続の文でどんなことがらが述べられるにせ

よ、(a) 特立提示ということが後に同じ要素に言及するときの円滑な導入の役割を果たすということと、(b) 特立的に提示された要素はそれ以外の要素よりも聞き手の短期記憶の中で深く印象づけられるものであるということである。(Hetzron 1975: 379)

すなわち、後続の談話で項目が語りつがれるかどうかというのは、特立提示の形式に必ず伴う現象なのではなく、単なる傾向性として捉えられなければならないということである。ちなみに存在文についてしてみると、今回の調査で用いた文章では全部で32の存在文が観察されたが、その主語名詞句によって表された項目が後続の談話に語りつがれていたものは全体の56%にあたる18例であった。これが多いか少ないかは、特立提示機能とは関わりのない形式の数値と比べてみなければ決定できないが、少なくとも、今回の調査で、談話主題の導入時に存在文が非常に頻繁に用いられていたこと、また、言語形式にそれほど多くのバリエーションがなく、特定の形式、中でも特に存在文に集中していたことから、この形式が特立提示機能と深い関わりをもつものであることは間違いないと言える。

ところで、観察された18例の存在文のうち、次のように位格名詞句を伴うものが3例あった。

- (8) クスリには有効濃度というの<sup>が</sup>あって、それより下がるとクスリは効かなくなります。

その場合に3例とも位格名詞句が主語に先行していることは注目に値する。これは、存在文の通常の語順が位格—主語の順であることの現れであるが(Kuno 1971)、この通常の語順はHetzronの唱えるように後続談話で語りつがれることになっている項目は出来るだけ文の後ろに位置させようとする語順の原理に従って実現されたものであると考えられる。

この原理がよりいっそう明確な形で実現されるのはコピュラ文である。コピュラ文とは、「～は～だ」「～が～だ」という形と、分裂文といわれている「～のは～だ」「～のが～だ」という形の4つのタイプの文で、今回の調査で談話主題導入のために用いられたのはわずかに10例と数はきわめて少ないが、そのどれをとってみても、述語名詞句、すなわち文末近くの名詞句の方が後続談話に持続している。先に挙げた(2)の冒頭文もこの例であるが、ここでは「AがBだ」と「AのがBだ」の例をつけ加えておくことにする。

- (9) 一方あげるのと同時に、調節するために下げる機構も働いているわけで、こちらの働きがにぶってきても、血圧はだんだんあがってしまいま

す。これが**本態性高血圧**で、ある程度年をとってくると、血圧は自然にあがってきます。/ こういう本態性高血圧のときは、……。

- (10) (糖衣錠は) 胃にはいつてすぐにこわれないために固めてあります。/ それをもっと徹底させたのが**カプセル剤**です。φ腸溶剤といて、胃の酸でこわれないように、顆粒剤をゼラチンのカプセルで保護したものもあります。(φは省略を示す)

以上のように、談話主題の持続のあり方と語順とは密接な関わりを持つものである。その点について、コンピュータの諸形式を対象に詳しく調査したものとして、砂川 (1994, 1995) があげられる。

砂川 (1994) は、「AはBだ」と「AがBだ」という二つの形式のコンピュータのうち、同定文と認定されたものについて、A・B各項の後続談話における持続の有無を調査した。また、砂川 (1995) では、分裂文「AのはBだ」や「AのがBだ」に関して同様の調査を行っている。こちらの調査のほうは対象を同定文に限定せず、上記の形式を持つすべての分裂文に渡っての調査である。これらの調査の結果は次の通りである。

#### 「AはBだ」

	持続あり	持続なし	計
A項	11例 (11.8%)	82例 (88.2%)	93例 (100%)
B項	78例 (83.9%)	15例 (16.1%)	93例 (100%)

#### 「AがBだ」

	持続あり	持続なし	計
A項	56例 (45.9%)	66例 (54.1%)	122例 (100%)
B項	39例 (32.0%)	83例 (68.0%)	122例 (100%)

#### 「AのはBだ」

	持続あり	持続なし	計
A項	66例 (34.7%)	124例 (65.3%)	190例 (100%)
B項	125例 (65.8%)	65例 (34.2%)	190例 (100%)



## 「AのがBだ」

	持続あり	持続なし	計
A項	24例 (23.5%)	78例 (76.5%)	102例 (100%)
B項	66例 (64.7%)	36例 (35.3%)	102例 (100%)

上記の調査は、項目が新規に導入された場合だけに限ったものではないために、今回の調査との単純な比較は慎まねばならない。しかし、次の点が今回の調査結果と同じ傾向を示していることは興味深い。すなわち「AがBだ」という形式を除く他の三つの形式で、Bの持続がAの持続に比べてはるかに高い割合を占めているという点である。後続談話に持続していく項目は文末近くの位置に配置される傾向が高いという傾向性をここにも見て取ることができるのである。

「AがBだ」にそのような傾向性が現れなかったのは、この形式に他の三つの形式には見られなかった特徴が観察されたことと関連があるものと思われる。他の形式には現れずこの形式だけに顕著に見られたのは、AとBのどちらの項に関しても新規に導入する項目が用いられている例がほとんど見られなかったという点である。すなわち主語名詞句、述語名詞句のどちらの場合も、先行談話ですでに言及されている項目か、先行文脈や発話の状況から予測される項目が用いられているのが普通で、聞き手の意識の中で活性化されていると話し手に予想される項目が大半を占めているということが観察された。このことは、「AがBだ」という形式に特立提示の機能はないということ推測させるものである。

一方、今回の調査では、コピュラ文10例のうち3例がこの形式であり、コピュラ文全体の3割強という高い比率を示す。またそのすべてが「AがBだ」のB項のほうに新しい項目が現れて、さらにそれが後続談話で持続しているのである。これは、砂川(1994)の調査とは明らかに食違う結果である。今回の調査ではサンプル数があまりに少なく、判断材料に乏しいが、おそらく書き手の癖や文章のスタイルなどの影響によって異なった結果が生じたものと思われる。この点については、さらに十分な調査をする必要がある。

また、「AがBだ」という形式には、砂川(近刊)が指摘するようにB項を後続談話に持続させる話題設定型のタイプとA項を卓立させる主語卓立型のタイプが認められる。この種のタイプの違いが後続談話への持続の可能性にも当然影響を与えているはずである。その点を踏まえた上で、再度詳しい調査をし

てみる必要がある。

今回のパイロット的調査では、談話の中に新たな談話主題を導入する形式を求め、それらのうちの存在文とコピュラ文が特定の項目を特立的に提示する機能をもつことを明らかにした。また、Hetzron が主張するように、特立提示機能は後続で語りつがれることになっている項目をなるべく文の後ろに位置させようとする語順の原理と深い関わりがあるものであるということも確認できた。しかし砂川 (1994) の調査にみられたように、文頭の項目の方が文末の項目より高い持続傾向を見せる場合もある。この点だけをとってみても、特立提示機能と語順との関係はHetzron が考えるほど単純なものではなさそうである。この点について、今回は十分に考察を加えられなかった。以上はなほ不十分ではあるが、今後の方向付けをするための研究ノートとしてこの稿を位置づけたいと思う。

#### 注

1. Lambrecht (1994) は、現象文の下位分類として出来事の報告を行うタイプと特立提示を行うタイプの2種の存在を認めている。特立提示を行うというのは、後に述べるように、談話の中に新しい項目を導入する機能と深く関わるものである。

#### 参考文献

- Chafe, W. 1987 "Cognitive constraints on information flow." in R. Tomlin ed., *Coherence and grounding in discourse*, 21-51, Amsterdam: John Benjamins.
- Givón, T. 1983 "Topic continuity in discourse: an introduction." in T. Givón et al. eds., *Topic continuity in discourse: a quantitative cross-language study*, 3-41. Amsterdam: John Benjamins.
- Givón, T. 1988. "The pragmatics of word-order: predictability, importance and attention." in M. Hammond et al. eds., *Studies in syntactic typology*, 234-284. Amsterdam: John Benjamins.
- Hetzron, R. 1975. "The presentative movement or why the ideal word order is V. S. O. P." in C. Li ed., *Ced Word order and word order change*, 347-388. Austin: University of Texas Press.
- Kuno, S. 1971. "The position of locatives in existential sentences." *Linguistic Inquiry Vol. II, No. 2*, 333-378.
- Lambrecht, K. 1994. *Information structure and sentence form*. Cambridge: Cam-

bridge University Press.

南不二男 1974. 『現代日本語の構造』大修館書店。

砂川有里子 1994. 「コピュラ文と語順の原理：同定文『AはBだ』と『BがAだ』」国語学会平成6年度秋季大会要旨, 103-109.

砂川有里子 1995. 「日本語における分裂文の機能と語順の原理」仁田義雄編『復文の研究』, 353-388. くろしお出版。

砂川有里子 (近刊) 「日本語コピュラ文の類型と機能—記述文と同定文—」『小泉保教授古希記念論文集 (仮題)』大学書林。